

『『マイマイ新子』を読んで』(岩本修治)

[おすすめしたい本:マイマイ新子(マガジンハウス)]

誰にも幼い頃の思い出がある。ふるさとの情景、そこに生きる人々の暮らし、喜びや悲しみなど心の記憶、それらはどれもが懐かしく、思い返すほど妙にしんみりと、またホットした安堵感をも与えてくれる。本書は昭和 30 年代、6才の新子を主人公に、その家族と幼な友だちとの何気ない日常生活を連作的に綴ったものである。そのどれもが読者自身の幼少期と重なり、自分自身を主人公の新子に置き換えて読み進めてみても、何の違和感も感じないのが不思議であり、面白くまた懐かしい。

その昔、山賊が住んでいたという洞窟を子ども達がこわごわと探検する場面がある。ガキ大将の八郎が「よし出発だ、みんなオレに命を預けたな！」というセリフ。どこで覚えたのか大人ぶってみるのだが、途中、新子の悲鳴に驚き、我先にと逃げ帰ってしまう。それが格好悪いのか次の日、八郎は仮病を使い休んでしまう。そこに、誰もが覚えがあろう、子ども達の好奇心と不安との葛藤やガキ大将の微妙な子ども心が垣間見える。

本書は内容を変えてこうした短編が続くのだが、単なる思い出話に終始するのではなく、一貫した主旋律がある。それは、子どもの正義感と家族の温かい愛情であろうと思うが、子どもと大人達の何気ない言動の節々に、どうかすると見逃してしまうほどに、さりげなく且つほのぼのと表現されているのが心地良い。

本書は興味を引きつける特別なストーリーがあるわけではない。しかし、読後に何とも言えないさわやかな余韻に浸ることができるのは間違いない。昔は良かった・・・などと感傷的なことを言うつもりはさらさらないが、日本人の心のふるさとの情景として語り継ぎたい一冊であろう。終りに「マイマイ」の意味について記するつもりでいたが、紙面がなくなってしまった。その意味については、是非、本書で直接読み取っていただきたい。